

人物で語る 日本デンマーク

③2

杉山 亮作 りょうさく



自宅前の庭で品種改良に励む
杉山亮作
(杉山潤作氏蔵)

杉山亮作は、一八八八年（明治二十一年）十一月に碧海郡河野村（現安城市河野町）で生まれた。尋常小学校を卒業すると高等科へ進学したが、岩槻信治とは同級生であった。高等科を修了すると、亮作は農業に従事し、信治は、やがて山崎延吉の招きで県農事試験場に勤めることになったが、高等科での親交は一生続いたという。

さて、河野の茄子苗の栽培がいつごろ始まったかは不明であるが、亮作の手記によると江戸時代末期の元治・慶應年間ごろで、一八八二年（明治十五年）ごろまでは、農家がそれぞれ自家用の茄子苗を育てる程度で、苗を販売することはなかった。このころは、人より一日でも早く苗を育て、一日でも早く茄子を出荷することが第一であったという。

しかし、一八八二年（明治十五年）ごろになって、茄子苗の栽培が注目されるようになり、栽培農家は少しずつ増えていった。一八九二年（明治二十五年）には、栽培面積八畝（ハアール）、茄子苗四万本ほどであった。以後、栽培面積や茄子苗の出荷本数も増加していくが、大正時代の中ごろになると、頭打ちの現象が現れてきた。

一九二〇年（大正九年）に碧海郡農会の技手として着任した尾崎五平治は、「河野茄子苗の改善の余地は多い。今改めなければ、後になって後悔することになる」といって、園芸組合の設立、品種改良、栽培方法の改善、半促成茄子栽培、茄子苗品評会、茄子苗の共同出荷等について指導した。そして、一九二一年（大正十年）九月には河野園芸組合が設立され、神谷増市が初代の組合長になった。組合では、一九二二年（大正十一年）から、県農事試験場育成の橘田茄子を原種に、組合直営の採種圃を設け、品種改良に取りかかった。また、栽培方法の改善、茄子苗品評会等も行い、優良な茄子苗を出荷した。

一九二四年（大正十三年）、亮作は、県農事試験場の技師であった岩槻信治に茄子の品種改良を強く勧められた。そして、一九二六年

（大正十五年）七月から岩槻技師の指導を受けながら品種改良に取りかかった。

その結果、一九二八年（昭和三年）には、一代交配雑種「河野中生」「河野早生」を開発し、河野茄子苗の名声を不動のものにした。

一九三〇年（昭和五年）五月、山崎延吉は、天皇陛下に御進講の際、「河野中生」「河野早生」の写真をお見せした。亮作は、「こんな光栄なことにはなかった。品種改良への熱意がますます強くなった」と述懐している。

亮作は、河野茄子品種改良研究所を設立し、茄子の品種改良と共に茄子の種子の販売を行った。そのほか、稲の品種改良にも着手し、「良作」という新品種を開発した。一九三〇年（昭和五年）の記録によると、栽培面積十三・五町、出荷本数五十八万本であった。

亮作は、「茄子の品種改良が生きがいでした。この仕事は実に根気のいることで、気長に観察することが大切です。この仕事は、ほかの人には任せられません」と述べている。

亮作は、一九六一年（昭和三十六年）に品種改良の実績が認められ、第十一回岩槻賞を受賞した。



河野中生(右)と早生
(杉山潤作氏蔵)

文 稲垣維晃 つたあき